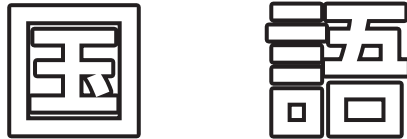


2026年度 入学試験問題



(6 0 分)

〔 注 意 〕

-
- ① 問題は㊦～㊨まであります。
 - ② 解答用紙はこの問題冊子の間にはさんであります。
 - ③ 解答用紙には受験番号、氏名を必ず記入すること。
 - ④ 各問題とも解答は解答用紙の所定のところへ記入すること。
 - ⑤ 各問題とも特に指定のない限り、句読点、記号なども一字に数えること。
-

西大和学園高等学校

問題は次のページから始まります。

一 次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

この本では、「正しさは人それぞれ」という主張が事実としても道徳的な態度としてもまちがっていることを論じてきました。あちこち回り道したようですが、言いたいことは一貫してシンプルです。「正しさは人それぞれ」でも「真実は一つ」でもなく、「正しさはそれに関わる人々が合意することで作られる」ということです。

もちろん、「正しさは人それぞれでない」といつても、人はすべてまったく同じだなどと言いたいわけではありません。人は一人ひとりと異なる個別的な存在です。しかし、お互いに理解不可能なほど異なっていることはない。人は、同じ生物種として基本的に同じような感覚器官や身体構造を持っており、同じように感じたり考えたりします。事実として、人はそれほど違っていません。

だからこそ、考えが異なる他者とも理解しあうことが可能はずです。考えの違いの根底には、人間として共通の部分があるはずだからです。「この人の考えていることはわからないな」と思ったときでも、いったいどういう関心にもとづいて、何の目的でそのように考えているのかを聞いてみれば、わかることが多いでしょう。

もちろん、相手の考えがわかったからといって、それを自分も受け入れるかどうかはまた別のことです。受け入れられないなと思ったときには、どこがどうして受け入れられないのか、理由を言って説明し、相手の言い分を聞いてみる。それを聞いて、まだ納得できなければさらに問う。そうした手問のかかるやり取りのうえで、ようやくお互いに納得することもできるでしょう。そのようにして、お互いに納得のできる結論を作り上げることができたなら、それが「正しさ」というものです。

相手が私の考えに納得したら、強制などしなくても自分から私の考えに従うでしょうし、自分が相手の考えに納得したら、強制などされなくても自分から相手の考えに従うでしょう。これが「正しさの力」です。暴力や強制でなく、正しさの力によってみずから判断し行動することが望ましい。なぜなら、そうした判断や行動は、事態に適切に対応するものである可能性が高いからです。他方、¹根拠のない信念や思い込みにもとづく行動が事態を改善させる見込みはほとんどないといってもよいでしょう。

また、残念ながら最終的にお互いに納得するには至らなくても、少なくとも相手には相手なりの根拠や言い分があることがわかれば、^a誹謗中傷したり罵詈雑言を浴びせたりしようとは思わなくなるでしょう。

もちろん、すべてのことについてこのように理想的な解決ができるとは限りません。どうしても理解してくれない相手には、最終的には強制しなくてはならないこともあるでしょうし、相手が暴力的に迫ってきたときには逃げた方が得策という場合もあります。しかし、なるべく暴力をなくして、「より正しい正しさ」を作っていくように努力することが正しいことだと私は考えています。

それに対して、「正しさは人それぞれ」では、お互いが納得することをはじめから目指していません。そうした態度は、一見すると多様な他者を尊重しているように見えるかもしれませんが、相いれない考え方の者同士がぶつかったときには、自分の「正しさ」の暴力的な押しつけあいになりません。だって、各人それぞれの「正しさ」に同じ価値があつて優劣がつけられないというのであれば、事実や論理によってどちらが正しいのか決着がつけられないということになるからです。

最近、SNSなどで、自分の気に入らない主張に対して罵詈雑言を吐き、誹謗中傷を行う人がいることが問題になっていますが、そうしたふるまいは「正しさは人それぞれ」と表裏一体のものだといつてもよいでしょう。「正しさは人それぞれ」は、自分自身の正しさの根拠や理由についても考えない態度を助長するからです。

お互いに納得するためには、自分が相手の考えを理解するだけでなく、相手に自分の考えを理解してもらわなくてはなりません。そのためには、自分の考えが正しい理由として、相手も納得するような客観的な根拠を示さなくてはならない。それはそれでたいへん手間のかかる作業です。客観的な根拠を示すためには、調べなくてはいいけません。世界についてのすべての事実が頭の中に入っている人などいないでしょうから。

最近ではインターネットで気軽に ^bケンサクすることができそうですが、インターネットにはウソの情報もたくさん ^cケイジされています。その中から、より信頼性の高い情報を見極めることもなかなか手間がかかります。その第一歩が「誰が言っていることかを確認すること」、²第二歩が「複数の専門家の見解を調べてみること」だということです。

しかし、²「正しさは人それぞれ」と言ってしまうと、そうした努力をしないで済ませることができてしまいます。

近年、「正しさは人それぞれ」と手をたずさえて広がっている風潮に、³「感情の尊重」があります。人間は不正に対して怒りを感じる感情的な傾向があります。感情は眼前の状況に対する反射的な反応です。自分でも理由がよくわからないままに、「やつは不正だ」という思いが自分の心に到来します。自分自身の正しさの客観的な根拠や理由を考えない人は、この感情を正しさの根拠だと思ってしまう。「自分が正しいと感じるから、自分にとっては正しいんだ」と。

しかし、そのように思ってしまうことは極めて危険です。感情、とくに不正に対する怒りの感情は、人間を暴力に駆り立てるからです。感情に従うと、相手のことを理解する前に攻撃することになりかねません。

ある一人の人に知覚される状況は、一面的なものにすぎません。相手がどういう思いでそう言ったのかとか、そう思うに至った背景や経緯は何なのかといったことは直接目には見えません。感情は、そうしたものに思いをいたすことなく反射的に作動してしまいます。それゆえに、自分の感情だけを根拠にして正しさを決めることはできないのです。

にもかかわらず、近年「感情の尊重」という風潮が広がっています。これは、感情が、自分の主張の客観的な根拠を示すという面倒なことをしなくても、ラクに自分の考えの正しさを ホシヨウ^dしてくれるように思えるからです。

「正しいかどうかは自分の感じ方で決まる」という主旨の歌謡曲が増えています。もちろん、感じ方でどうこうなる場合というものもあるでしょう。「自分はダメな奴だ」と思っていたら何事もうまくいかないが、「自分もそんなに捨てたもんじゃない」と思ったらうまくいくようになるとか（まあ、実際のところはそんな簡単にうまくいくことはないと思いますが）。

しかし、ほとんどの場合は、感じ方を変えたからといってどうこうなるものではありません。今日食べ物を買うお金がないほどの貧困に追い込まれた人が、「自分は幸せだ」と感じ方を変えてみたからといって、お腹がふくれるわけがない。

何か困難な状況に直面したときには、感じ方を変えるのではなく、状況を変えることの方が大切です。しかし、状況を変えるのはたいへんなことです。多様な他者と連帯して大きな運動の流れを作らなくてはなりません。「なんでも感じ方しだい」というような言葉は、困っている人を励ますよい言葉のように見せかけておいて、その実、困っている人を困った状況に放置する態度を助長する言葉です。

人間は一人では生きていません。自分とは異なる他者とも助け合って生きていかなければなりません。それなのに、「正しさは人それぞれ」とか「何でも感じ方しだい」といった、お互いに理解しあい助け合うことを拒否する態度が蔓延するのはとても困ったことです。

「いまこそ、どうしたら多様な個々人が抑圧されないようにしながら多数の人たちが連帯できるのかという大きな課題にもういちど真剣に取り組まなければならない」と書きました。どうしたらよいのか、わかっていただけたでしょうか。あるいは少なくとも、私がどうしたらよいと考えているのかはわかっていただけたでしょうか。

一言でまとめると、「人それぞれはもうやめよう⁴」ということです。「人それぞれ」と言ってしまういたくなったときにも踏みとどまって、相手のことを理解し自分のことを理解してもらおうとする努力を ホウキ^eしないことです。

（山口 裕之『「みんな違ってみんないい」のか？ 相対主義と普遍主義の問題』）

問一 二重傍線部 a、e のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部 1 「根拠のない信念や思い込みにもとづく行動が事態を改善させる見込みはほとんどないといってもよいでしょう」とあるが、なぜそう言えるのか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ① 他者を納得させる普遍性のある考えを思いつくことも、他者の行動をコントロールすることもできないから。
- ② 他者を理解する姿勢がないために、事態をいい方向に導くのに足るだけの良いアイデアが思いつかないから。
- ③ 他者を十分に納得させる説得力のある考えを提示することができずに、事態を適切に収拾できなくなるから。
- ④ 他者を一定の水準まで理解させる考えを示すことができないために、暴力や中傷を防ぐことができないから。

問三 傍線部 2 「正しさは人それぞれ」と言ってしまうえば、そうした努力をしないで済ませることができてしまいます」ということが言えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ① 専門家の言っていることは学問に裏打ちされた正しさがあり、信じるに値するものだと考えるから。
- ② 世界のあらゆる事象について検討することは非現実的であり、そうした努力は無駄だと思われるから。
- ③ インターネット上の嘘の情報に惑わされるぐらいなら、個人の主張の正しさを認めたほうがラクだから。
- ④ 自分と他人の考えが相容れないものとすることで、自分の意見の正当性を考慮する必要がなくなるから。

問四 傍線部 3 「感情の尊重」について、この風潮はなぜ生じてしまうのか。その理由を七〇字以内で説明せよ。

問五 傍線部 4 「人それぞれはもうやめよう」とあるが筆者が「人の正しさはそれぞれ違う」ことを否定するのはなぜか。本文全体を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。

二 次の文章を読み、あとの問いに答えよ。

客を乗せた何台かを見送ったあと、ようやく、空車の赤ライトを灯したタクシーが停まった。

^a新しい年の幕開けを待つ街は薄暗い。駅前通りに連なる飲み屋は早々に店じまいを決めて、年末年始の営業案内を貼ったシャツターが冷たい風を受けている。帰省^{きせい}シーズンの東京は人が減ってすかすかしているのに、帰る場所のない者には尚^{なほ}も身の置きどころがなく感じられ、連休特有の「居残り感」に心もすかすかする。帰る場所どころか、^xのっぴきならない事情によってつい今しがた帰る部屋さえも失った僕は、もしタクシーを捕まえるのがもう少し遅かったなら、その場にうずくまったまま年明けを待たずに凍えていたかもしれない。

生涯^{しょうがい}最悪の大晦日。いいことなんて何ひとつなかった一年の締めくくりには打ってつけとも言える。妙に納得しながら僕はタクシーの後部座席へ尻をすべらせ、一人暮らしの男友達が住むアパートの所在地を告げた。気力さえあれば四十分かそこいらで歩ける距離ではあった。

「三田通りから駒沢通りへの順路でよろしいですか」

ドライバーは女性だった。長い黒髪^(注1)をバレッタでまとめた横顔は涼しげで、僕よりはいくらか年上だろうが、まだ若い。

「お任せします」

夜の街を流していれば怖い目にも遭うだろう。走りだした車のなかで沈黙が続くと、僕はなんだか気づまりになって、自分はセーフな人間であることを証すように要らぬ世間話を口にした。

「いや、しかし、やっぱ車も少ないもんですね、大晦日ともなると」

「そうですね」

「なんだかんだ言っても、結局、みんな家で紅白観^(注2)てんすかね」

「そうですね」

「今年も大トリは野鳥の会で決まりっすね」

「どうでしょうね」

そこであえなく力尽きた。

思えば、軽口を叩いていられる身の上でもなかった。もうじき始まる新しい年を、僕は無事にクリアすることができののだろうか。

いつまで東京でやっていけるのか。二年後、三年後はどこで何をしているのか。考えるほどに鳩尾(注3) みぞうちのあたりがすうすうと冷たくなっていく。かじかんYだ指先をデニムにこすりながらため息を吐きだした僕に、そのとき、ドライバーの彼女が言った。

「でも、車の排気ガスが少ないせいかな、この時期の東京は空がきれいですよ」b

野鳥の会はスルーされたが、会話に身が入っていないわけでもないらしい。

「空？」

「街(注3)のネオンも少ないぶんだけ、月や星がよく見えるんです」

「へえ」

反射的に夜空へ目をやり、うげ、と僕はのけぞった。車の窓越しにもかかわらず、たしかに、そこにはたまげるほどに明るい星々の瞬きがあった。肉眼に映る星のみならず、映るわけもない幾億もの光線までも透かして見せるような天空。満月にはまだ早い月も、その欠落を補ってあまりある光の量を広げている。

「やるなあ」

誰にともなく洩もらした僕に、再びドライバーの声。

「お正月のあいだも、きつと、ずつとそんな感じですよ。天気さえよければ」

「へえ」

「¹だから空を見上げていたほうがいいんです」

「ああ、坂本九ちゃんも歌ってましたっけね、上を向いて歩こうって」

またも軽口を叩いて再びスルーされたあと、僕はあらためて彼女の言ったことを咀嚼そじくした。せめて空を見上げていたほうがいい。どんなつもりで彼女はその一語を僕へ向けたのだろうか。

空を仰いで考えているうちに、目的地が刻々と近づいてきた。赤信号で車を停めた彼女が料金メーターを切る。いくらなんでもまだ早い。

「あの、まだ、もうちょい先ですんで」

「ええ」

「けっこう距離あります」

「ええ」

「駅を越えて、まだその先……わりとあるんです」

「ええ」

ええ、ええとうなずきながらも、彼女はメーターを動かそうとしない。普段はタクシーなど無縁の身にはありがたいけれど、ますます胸の内がわからない。

男友達のアパートに到着したのは、その数分後だった。五百円近い距離をタダで走ってくれたであろう彼女に、僕は恐縮しきりに千円札と五百円玉をさしだした。

「なんかすみません。あの、釣りはいいですから」

メーターの表示は一四四〇円。たかだか六〇円の釣り銭ですら、しかし、彼女は受けとろうとしなかった。

「どうぞ、よいお年を」

^{(注6) りちぎ} 律儀に釣り銭を数えた彼女がふりむき、初めて視線が交わった。瞬間、僕はその目が赤く腫^はれているのを見てとり、どきっとした。尋常^{じんじょう}ではないレベルで充血^{じゅうけつ}した白目。釣り銭を受けとる際、ほんの一瞬だけ触れた指先も、僕のそれより冷たかった。

ああ、そうか……。ようやく僕は悟った。何があつたのかはわからない。でも、この人は今、苦しみのなかにいる。もしかしたら僕以上にのびきならない事情を抱えているのかもしれない。だからこそ夜空の明るさにも、人の痛みにも敏感で、冴えない顔の僕に何かをしようとしてくれた。

² 「あなたこそ……」

東京に来て初めて、いや、もしかしたら生まれて初めて、僕は心からの願いをこめて、この常套句^{(注7) じょうとうく}を人に贈った。

「どうか、いい新年を迎えてください」

もうじき訪れる新しい年、どうかこの人にいいことがありますように。

全力で祈ったら、鼻の奥がつんとして、なんだかバカみたいに泣きそうになった。

後部座席のドアが開く。後ろ髪を引かれながらも、凍てつく風が車内に入りこまないようにと、僕はすばやく外へ出る。再び車を走らせる直前、こちらをふりむいた顔が一瞬だけ笑みをたたえた気がした。

すかすかの路上を照らす月明かりのもと、遠ざかるテールライトが闇に溶けるまで、僕は一心に彼女の幸運を祈りつづけた。

どうか、彼女が本当に、本当にいい新年を迎えられますように。

³ 「どうか、どうか、どうか……」

【語注】

- (注1) バレッタ … 髪を留めるための小物。
(注2) 紅白 … 「紅白歌合戦」。日本の大晦日に放送される、テレビの音楽番組。
(注3) 鳩尾 … 胸とお腹の間にある部分。
(注4) デニム … 厚手の綾織り綿生地。
(注5) ネオン … 夜の街や建物を彩る光。
(注6) 律儀 … まじめで正直、約束や決まりをきちんと守る性格。
(注7) 常套句 … 決まりきった言い回し・お決まりの表現。

問一 二重傍線部 X・Y の意味を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

X 「のっぴきならない」

- ① 我慢できないほどに腹立たしい
② 自分でも整理できないほどに曖昧あいまいな
③ 避けることができないほど切迫した
④ 偶然に起きたことであり仕方のない

Y 「かじかんだ」

- ① 緊張して震える
② 熱さを感じて痛い
③ 乾いてひび割れる
④ しびれて動かしにくい

問一 文章では波線部 a「新しい年の幕開けを待つ街は薄暗い。駅前通りに連なる飲み屋は早々に店じまいを決めて、年末年始の営業

案内を貼ったシャッターが冷たい風を受けている」と波線部 b「でも、車の排気ガスが少ないせいか、この時期の東京は空がきれいですよ」と大晦日の東京の街の風景を対照的に表現している。このように対照的な表現したことの小説内容への効果について最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

① どれほど美しい星空の下にいても、帰る場所のない人間の孤独は決して癒やされることがないという、世界と個人の断絶した有り様を示している。

② どれほど辛いことがあっても、諦めずに上を向いて歩き続ければ、いつか必ず報われる時が来るという、個人の努力と忍耐の大切さを示している。

③ 普段は排気ガスで汚れている東京でも、人混みがなく静かな時期になれば美しい自然が見られるという、都市の二面性と環境の変化を示している。

④ 孤独や喪失といった人生における暗闇の中にいるからこそ、人の優しさや祈りという明るい光がより尊く、鮮やかに感じられることを示している。

問二

波線部 1「だから空を見上げていたほうがいいんです」とあるが、この発言に込められた彼女（タクシードライバー）の意図の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

① 大晦日で排気ガスが減って空気が澄んでいる貴重なタイミングなのだから、健康のためにも窓を開けて、新鮮な空気を吸ったほうがいいという提案。

② 足元の厳しい現実や不安な未来ばかりを見てふさぎ込むよりも、今目の前にある美しいものに目を向けたほうが、少しは心の慰めになるという助言。

③ 坂本九の『上を向いて歩こう』の歌詞にあるように、どんなに辛くても涙がこぼれないよう上を向き、無理にでも明るく振る舞うべきだという激励。

④ 目的地までの道順や料金メーターを気にして落ち着かない様子の客に対し、大晦日のドライブなのだから美しい夜景を楽しんでほしいという気遣い。

問四

波線部 2「あなたこそ……」と、僕が運転手に言葉を伝えたのはなぜですか。その理由を、主人公が気づいた彼女の様子に言及して、七〇字以内で説明せよ。

問五

傍線部**3**「どうか、どうか、どうか——」とあるが、僕は自分自身の苦しみから救われたわけではないのに彼女（タクシードライバー）の幸運を願ったのはなぜか。本文全体の内容を踏まえて七〇字以内で説明せよ。

三

光源氏（源氏の君）と宮は、ある秘密を隠している。この場面は、宮が懐妊したところから始まるが、実はその子は帝の子ではない。しかし、表向きは帝の子として生まれてくることになる。この状況を踏まえて次の文章を読み、あとの問いに答えよ。（問題の都合上、一部改変あり）

「御物の怪にや」

と、世人も聞こえ騒ぐを、宮いとわびしう、

「このことにより、身のいたづらになりぬべきこと」

と¹思し嘆くに、²御心地もいと苦しくてなやみたまふ。源氏の君は、いとど思ひあはせて、御修法など、^{（注）}さとはなくて所どころにせさせたまふ。

「世の中の定めなきにつけても、³かくはかなくてややみなむ」

と、取り集めて嘆きたまふに、^x二月十余日のほどに、男御子生まれたまひぬれば、⁴なごりなく、内裏にも宮人もよろこびきこえたまふ。

《中略》

上の、¹いっ日も早く御覧になりたがっておいでになることは、²限りなし。かの人知れぬ御心にも、³いみじう心もとなくて、人間に参りたまひて、

「源氏の君」⁵「上のおぼつかながりきこえさせたまふを、まづ見たてまつりて奏しはべらむ」と聞こえたまへど、

「宮」「むつかしげなるほどなれば」

とて、見せたてまつりたまはぬも、ことわりなり。さるは、いとあさましう、^{（異常なまでに光源氏に生き写しでいらつしやる若宮の様子）}めづらかなるまで写し取りたまへるさま、違ふべくもあらず。宮の、御心の鬼にいと苦しく、

「人の見たてまつるも、あやしかりつるほどのあやまりを、まさに人の思ひ咎めじや、さらぬはかなきことをだに、疵を求むる世に、いかなる名のつひに漏り出づべきにか」

と思しつづくるに、身のみぞいと心憂き。

《中略》

四月に内裏へ参りたまふ。ほどよりは大きにおよすけたまひて、やうやう起きかへりなどしたまふ。あさましきまで、紛れど

ころなき御顔つきを、思しやらぬことにしあれば、

「また並びなきどちは、無類に優れている者同士はなるほど似通つておられるものだなあげに通ひたまへるにこそは」

と、思ほしけり。いみじう思ほしきしづくこと限りなし。源氏の君を、限りなきものに思しめしながら、世の人の承認申し上げようと

じかりしによりて、坊にも据ゑたてまつらずなりにしを、あかず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさま容貌にねびもておはす

るを御覧するまに、心苦しく思しめすを、

「かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、瑾なき玉」

と（帝は）思しかしづくに、宮はいかなるにつけても、胸の暇なく、やすからずものを思はず。

例の、源氏の君、こなたにて御遊びなどしたまふに、抱き出でたてまつらせたまひて、

「皇子たちあまたあれど、そこをのみなむ、かかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえた

れ。いと小さきほどは、みなかくのみあるわざにやあらむ」

とて、いみじくうつくしと思ひきこえさせたまへり。源氏の君、面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙落ちぬべし。物語りなどして、うち笑みたまへるが、いとゆゆしううつくしきに、わが身ながらこれに似たらむは、いみじういたはしうおぼえたまふぞあながちなるや。宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。源氏は、なかなかなる心地の乱るやうなれば、まかでたまひぬ。

（宮は）わが御方に臥したまひて、

「胸のやる方なきほど過ぐして、大殿へ」

と思す。御前の前栽の、何となく青みわたれる中に、常夏のはなやかに咲き出でたるを、折らせたまひて、

「^Mよそへつつ 見るに心は 慰まで 露けさまさる なでしこの花

花に咲かなむと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」

とあり。わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほどにて、

「^N袖濡るる 露のゆかりと 思ふにも なほうとまれぬ やまとなでしこ」

【語注】

(注1) 御修法 … 病氣平癒のための祈祷。

問一 この物語は『源氏物語』である。源氏物語と同時代の『枕草子』の作者を答えよ。

問二 波線部X「二月」の月の異称をひらがなで答え、波線部Y「四月」の旧暦での季節を「春・夏・秋・冬」のいずれかで答えよ。

問三 傍線部1「思し嘆く」とあるように、若宮が誕生する以前、宮は「このことのために、きつとわが身を滅ぼすことになるにちがいない」と深く苦悩していた。この時の宮の心情として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

① 世間に知れ渡った物の怪のせいで、帝の子でない自分自身が物の怪となつて自身をも滅ぼしてしまうのではないかと恐れている。

② 帝の子でない子が生まれようとしている不安から、皇子誕生の遅れが、自身の体調の悪化と結びつけられることを心配している。

③ 身ごもった子が帝の子として扱われることで、いつかは真実が露見し、自身の命運も尽きてしまうのではないかと絶望している。

④ 帝の子でない若宮が無事に育つか、また物の怪のせいで未来に災いが起きるのではないかと、自身の運命の不吉さを感じている。

問四

傍線部2「御心地もいと苦しくてなやまたまふ」、傍線部3「かくはかなくてややみなむ」、傍線部5「上のおぼつかながりきこえさせたまふ」の訳として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

2「御心地もいと苦しくてなやまたまふ」

- ① ご気分もひどく苦しく宮はおわずらいになる
- ② お心持ちも非常に嬉しいと宮はお喜びになる
- ③ 不機嫌なのに宮は大変苦しんでいらっしゃる
- ④ ご心境も大変よいが宮は思い悩んでおられる

3「かくはかなくてややみなむ」

- ① こんなふうにも何もせず子どもを手放してしまっているものか
- ② できる限りむなしい形で宮との仲は終わってしまっているのか
- ③ このようにむなしく生まれることなく死んでしまうのだろうか
- ④ 宮との仲はこのようにあっけなく終わってしまうのだろうか

5「上のおぼつかながりきこえさせたまふ」

- ① 帝が気がかりに思い申し上げている
- ② 帝が待ち遠しく思い申し上げなさる
- ③ 帝がぼんやりと思い申し上げなさる
- ④ 帝が後ろめたく思い申し上げている

問五

傍線部4「なごりなく」から、帝はそれまでの心配が消え去ったことが分かるが、どのような心配が消えたのか、二〇字以内で説明せよ。

問六

二重傍線部甲「起きかへりなどしたまふ」、乙「思ほしけり」、丙「心苦しく思しめす」、丁「抱き出でたてまつらせたまひて」、戊「思ひきこえさせたまへり」の中で一つだけ、主語（主体）が帝ではないものがある。それはどれか、甲～戊の記号で答えよ。

問七

傍線部**6**「あさましきまで、紛れどころなき御顔つき」とあるが、この時の帝の認識として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ① 若宮が源氏の君に似ていることから、若君の父親が源氏の君だと知りつつも、自身の皇子として育てる政治的な理由から、つとめて可愛がっていた。
- ② 若宮の顔立ちから源氏の君との類似点に気づきながらも、若君の父親が源氏の君だと知らず優れた者同士が似通うのは当然だと無邪気に喜んでいた。
- ③ 若宮が源氏の君に酷似していることで、自身の血筋ではないと内心で疑いを抱きつつも、その疑念を周囲に悟られないよう必死で平静を装っていた。
- ④ 若宮が源氏の君に似ているのは親の欲目だと判断し、若君の父親が源氏の君だと知ることなく、皇子として類まれな才能を期待し、大切にしていた。

問八

傍線部**7**「源氏の君、面の色かはる心地して」と、傍線部**8**「宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける」について、この傍線部に表れる二人の心情を三〇字以内で説明せよ。

問九

傍線部**M**の源氏の君の和歌「よそへつつ…」と、傍線部**N**の宮の和歌「袖濡るる…」に共通する「なでしこ」は、何をたとえたものか、答えよ。

問十

形式段落をまとめた次のA～Eを、本文の順番に並べるとどうなるか、最も適当なものを次の①～④の中から選び、記号で答えよ。

- | | |
|---|------------------------------------|
| A | 宮と源氏の君が歌を詠み交わし、二人だけの秘密として苦悩を分かち合う。 |
| B | 生まれた子は源氏に瓜二つで、宮は秘密が露見することを恐れて苦悩する。 |
| C | 物の怪のせいか体調を崩した宮が男の子を出産し、宮中が喜びに包まれる。 |
| D | 帝が男の子の顔が源氏の君に似ていると指摘し、源氏は複雑な心境に陥る。 |
| E | 宮中で大切に養育されている男の子を見るにつけて、宮の苦悩は深くなる。 |

① B ↓ D ↓ A ↓ C ↓ E

② C ↓ B ↓ E ↓ D ↓ A

③ C ↓ D ↓ B ↓ A ↓ E

④ C ↓ B ↓ A ↓ D ↓ E

問十一

この文章の主題として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

① 若宮の誕生を契機に、実子であると告げられない源氏の君と宮の心理的苦悩、真実を知らない帝の無邪気な喜びが対比され、人知れぬ秘密が人間関係にあたえる影響が描かれている。

② 実子でなくとも若宮を深く愛し育てようとする帝の姿を通し、普遍的な親子としての絆と、新たな命の誕生がもたらす希望、そして社会の制約を超えた愛のあり方がしめされている。

③ 華やかな宮中における人々の喜悅と感情の解放が様々な視点を通し描写され、当時の貴族社会の複雑な人間関係、女性の置かれた立場が、世の無常感とともに浮き彫りにされている。

④ 源氏の君が実子である若宮を帝の子として密かに見守る歓喜を通じて、彼の人間的成長と、秘密が人生に与える影響がやがて物語全体に大きな波紋を広げる可能性が暗示されている。

